

# ドゥルーズ『シネマ』における 結晶的体制と非時系列的な時間について<sup>1</sup>

On the Crystalline Regime and the Non-chronological Time in *Cinema*  
by Gilles Deleuze

大山 載吉<sup>†</sup>

Noriyoshi OHYAMA

## Abstract

The first aim of this paper is to arrange in order the crystalline regime in *Cinema* by Gilles Deleuze, which consists of some types of time-image. We classify time-image in terms of its four peculiarities (purely optical and sound situation/indiscernibility of the actual and the virtual/space found by contemporary science/powers of the false), four kinds of power of time (contemporaneity of present with past/coexistence of sheets of virtual past/simultaneity of peaks of de-actualized present/time as series), three instances (description/narration/story), and three signs (crystalline signs/chronosigns/genesigns).

Secondarily dealing with the non-chronological time, we clarify, against the idea that the chronological time is linear, and the non-chronological time is nonlinear, what the words 'chronological' and 'non-chronological' in this book mean, and give some perspective to these questions: Why is time concerned with the problem of truth? Why do the powers of the false matter in the non-chronological time?

Finally, we explain how the mode of possibility in the traditional modal logic is abolished

<sup>1</sup> 本論では「シネマ」という表記で「シネマ1\*運動イメージ」と「シネマ2\*時間イメージ」の二巻を合わせた一冊の書物として表す。また、一巻と二巻を個別に論じるときは、それぞれ「運動イメージ」、「時間イメージ」として表記する。なお、本論における訳文は基本的に邦訳のあるものはそれを利用したが、本論の文体や文脈に合わせて変更した箇所もある（引用箇所の傍点は、原文イタリック体を表す）。

and the mode of necessity prevails in this world, and show why Deleuze had to re-create this mode into the notion of impossibility.

**Keywords:** Gilles Deleuze, *Cinema*, philosophy, the crystalline regime, time-image

## はじめに

本論の目的は、まず、ドゥルーズ『時間イメージ』において主題的に論じられる様々な種類の「直接的な時間イメージ」によって構成される結晶的体制を整理することである。次に、結晶的体制を貫く「非時系列的な時間」を取り上げ、『シネマ』で言われる「時系列／非時系列」ということの意味を解明し、そもそもなぜ非時系列的な時間と真理問題が密接に関わることになるのか、なぜ非時系列的な時間において「偽なるものの力能」という概念が重要になるのかについて一定の見通しを立てることである。最後に、そこからの帰結として、「可能性」という様相を分析し、これをドゥルーズが非時系列的な時間の観点から「共立不可能性」という概念として裁ち直すことになる事情を示す。

## I 結晶的体制——第一の特徴と第二の特徴

周知の通り、『シネマ』は二巻本である。一卷の主題は、主に人物の知覚／感情／行動の連関を司る感覚運動的図式に基づく運動イメージである。そこでは、時間は運動に従属しており、物体や身体や心の動きの認識を通じて間接的にしか表象されることがない。しかし、二巻では、もはや時間は何らかの対象の動きや変化としての運動に従属することなく、それ自体として出現する直接的な時間イメージが主題となる。極めて粗雑な概略ではあるが、こうした二種類のイメージの性質の差異が『シネマ』という書物の基本的な骨子を形成していると言えることができるだろう。

運動イメージと時間イメージの違いは『シネマ』の様々な箇所を確認されるが、本論は前者を有機的体制、後者を結晶的体制として比較対照を行う『時間イメージ』第6章に基づいて、まずは結晶的体制の四つの特徴を抽出する。『時間イメー

ジ』という書物の真諦とも考えられるこれらの特徴は、時間イメージのタイプとそれらが表現する「時間の直接的現前」の幾つかの仕方と対応しており、最初にその見取り図を描き出すことにしたい。

さて、結晶的体制の第一の特徴は「描写 (description)」に関わる。それが実景であれセットであれ、人物の有用な行動の間尺に合う形で現実世界を描写するというごく常識的な見解とは異なり、「結晶的」と呼ばれるのは、描写の対象と等価な描写、この対象に取って代わり、ロブ＝グリエが述べているように、この対象を創り出すと同時に消し去り、互いに矛盾し合い、先行する描写を移動させ変容させる様々な他の描写と絶えず入れ代わるような描写」(Deleuze 1985: 165=2006: 175) である。結晶的体制においては、描写それ自体が対象になるということだが、これは現実世界との関係が断絶するということの意味しているわけではない。むしろ、現実世界を行動の有用性という尺度で捉えることから解放し、それぞれの個体が有する身体のスケーलとパースペクティブでは把握不可能な現実世界の無限の豊かさ、深さ、奥行きを顕現させるために描写に描写を重ねていくことが求められているのである。

結晶的な描写とはある特定の主体に現れる世界像を描写することではなく、ある描写に別の描写が絶えず取って代わることで、「具体的な対象を「消しゴムで消し」、そこから幾つかの特徴だけを選び」、しかも、そうした線や特徴は「常に仮初めのもので、常に疑われ、動かされ、取り代えられる」減算の技法であると考えられる (Deleuze 1985: 63=2006: 61)。こうした減算の結果、もはや対象の明確な輪郭や背景との区別は消えていき、純然たる線、音、明暗が世界それ自体として出現することになる。これこそが、「純粋に光学的で音声的な状況」(Deleuze 1985: 10=2006: 4) であり、そこではもはや通常の意味での主体と客体の区別は消失しているのである。そこに立ち現れるのは、厳密に客観的な世界であり、特定の誰のものでもなく、どの視点から見られることがない世界であり、むしろあらゆる視点を内包するような絶対的な主体とでも言える世界である。

したがってここでもやはり、客観的なものと主観的なものとの差異は、光学的－音声的イメージという観点からは、暫定的、相対的な価値しかもたないと結論しなければならない。リヴェットにおいて極度に主観的なもの、また共犯的な主観主義は、完全に客観的である。彼は視覚的な描写の力によって、現実的なものを創造するからである。そして逆に、ゴダール

における極度に客観的なもの、批判的客観主義はすでに完璧に主観的であった。彼は現実の対象を視覚的描写でおきかえ、これを人物や対象の「内部」に侵入させたのである。……ロブ＝グリエは少なくとも初期の思考においては、もっと厳格であったことに注目しよう。彼は触覚的なものだけでなく、音や色彩までもが事実確認には不適當で、あまりに感情や反応に関係しているとして放棄し、線や表面や計測によって実行される視覚的な描写だけを確保した。(Deleuze 1985: 21=2006: 16)

ここで三度も言及されている視覚的描写とは、特定の意志や目的をもって対象に注目しこれを描写することではない。もはや人物は世界に対峙する主体性を失い、周囲の状況や環境に対して有用な行動を起こすことができず、「純粹に光学的かつ音声的な様々な状況」のただなかで目に映る情景を見るときも見続け、耳に響く音声を聞くともなく聞くままの状態にあるからだ。まさにこの意味で、結晶的体制の映画は「見者の映画であり、もはや行動する者の映画ではない」と言われるのである (Deleuze 1985: 166=2006: 176)。

結晶的体制の第二の特徴は、「ある現働的なイメージとこれの潜在的なイメージとの合体、二つの別々のイメージの識別不可能性」であり、これは時間イメージの嚆矢となる「結晶イメージ」によって最もよく表わされることになる (Deleuze 1985: 166=2006: 177)。この不可識別性は、第一の特徴からの必然的な帰結である。というのも、もはや目に映る光景を見るだけとなった人物にとって、自らの身体を通じて知覚された現働的なイメージは実際の行動へ展開する経路が失われ、いわばその場で宛てもなく渦巻くだけとなり、その結果、行動に不必要なほどの潜在的なイメージが湧出してくるからである。この意味で、第一の特徴と第二の特徴は一体のものとして考えても差支えないだろう (後に図表で確認するようにドゥルーズ自身もこれら二つの特徴が共に描写に関わるものとしている)。

この識別不可能性を有機的体制と対照させてみよう。有機的体制では、現実的なものと想像的なもの (=夢や回想や作り話など) は対立し、映画内世界での現実が展開し進行していく流れに、想像的なものが差し挟まれるという関係が成立している (例えば、登場人物が見る夢の場面とその夢から覚めた後の場面の区別など)。観客はそれが登場人物の想像や願望や夢や回想であって、彼／彼女が生きる現実とは異なると識別し (その識別が瞬時になされるか、一定の時間を要す

るかはケースバイケースであるが)、その場面が差し挟まれる以前と以後を繋げることで映画内世界の現実の連続性をたえず再構築する。

しかし、結晶的体制においては、観客の眼前に映し出されるイメージはそれが映画内世界の現実であろうとそうでなかろうと、あるいは物語世界の人物が現に知覚している対象であろうと単なる想像の産物であろうと、現実と想像の対立それ自体はもはや重要ではなくなり、現実ではなく現働的なもの、想像的なものではなく潜在的なものに焦点が当てられることになる。つまり、結晶的体制においては、有機的体制における「現働的な連鎖や、法則に従う因果的、論理的連結」によって連続する現実的なものと、そこに差し挟まれる「気まぐれと非連続」(Deleuze 1985: 166=2006: 176)の想像的なものとの対立から、現働的なものと潜在的なものが合流する回路へ存在の水準が深化しているのである。

実のところ、現実的なものと想像的なものは同じ現働的なものに属する。なぜなら、それらは意識的であれ無意識的であれ現に知覚されることになるからだ。日常にあふれた対象や情景であっても、突拍子もない想像の産物であっても、夢や錯覚、あるいは幻覚や幻聴であっても、それらは広い意味で知覚され、行動＝反応を誘発する(夢でさえ寝言や叫び声をもたらし、夢を見ていない睡眠中でも私たちは寝返りを打ち、蚊を手で追い払いさえする)。知覚は行動に必要な分だけの世界像を立ち現わせるメカニズムであり、行動に関わる限りで現働的なものに包括される。だからこそ、行動として返せる容量を超えた刺激や情報が到来するとき、現働的なものの領域の源泉としての潜在的なものが滲出してくることになる。だからといって、潜在的なものと現働的なものは対立するわけではない。両者は互いに区別されるにしても識別不可能であるという点が重要であり、この識別不可能性が以下に論じる本来的な時間の在り方を導く鍵となってくるのである。

周知の通り、現働的なものと潜在的なものの識別不可能性という事態は、知覚を時間という観点から読み解くベルクソンの知覚理論に由来する。これによれば、現働的なイメージとは、状況に応じて有用な行動を可能にするために浮き彫りになる知覚像のことであるが、時間の観点から見ると現在と対応することになる。意識的であろうと無意識的であろうと、知覚を含む行動一般はいつも現在時において起こされるからである(一般に、未来のある時点で起こす行動も、過去のある時点で起こされた行動も、行動が起きるその時点はいつも現在時である)。他方で、潜在的なイメージとは、行動の必要性や知覚像を越えて保存される記憶

そのものであり、その意味で過去と考えられる。知覚と記憶は本性を異にするが、知覚そのものが成立するためには潜在的なものとしての記憶＝過去が絶えず知覚像＝現在に重なってこななければならない、言い換えれば不可避免的に記憶＝過去は知覚に浸透していることになる。

例えば、全く初めて目にした対象を規定しようとする場合のことを考えてみよう。私たちは初めて見るその瞬間から過去の経験や手持ちの知識に自然に立ち回りそれらをこの対象に適用し、あるいは、対象をよく観察してその特徴を見定めようとするだろう。しかし、実際はこれら二つの作業を分けて考えることはできない。なぜならば、対象を知覚している瞬間にも時々刻々とそれは既知のものとなって記憶（＝過去）に組み入れられると同時に、この更新され続けている記憶が今この瞬間の知覚像に重なることで、より適切な判断に利用されることになるからだ。ということは、10秒間の対象への注視＝知覚は、この注視の開始以前の記憶が利用されるだけではなく、最初の1秒間の観察から得られた情報が記憶に組み込まれると同時に、新たに更新された記憶全体が2秒目の観察に利用されるということだ。それゆえ、10秒間の対象への注視＝知覚は10秒分の記憶の更新であると同時に、10秒分の知覚の深まりでもあり、10秒分の潜在的なイメージが重なり合うことで刷新され続けた現働的なイメージであるとも言えるだろう。

もちろん、ベルクソンが主張する持続としての本来的な時間は1秒目と2秒目を完全に区切ることなどできないものであるから、これはあくまで理解のための方便でしかない。しかし、ここで確認しておきたいのは、今この瞬間と言われるものは決してその前後から切り出して独立させることができないものであるゆえに、今この瞬間は過去になると同時に、過去として（次の）今この瞬間に滲出するということであり、結局のところ、今この瞬間は常識に沿って現在であると考えとしても、それは現在と同時の過去そのものであり、あるいは、過去に全面的に浸された便宜上の現在であるということだ<sup>2</sup>。

2 例えば、地球から1万光年もの距離にある星から届く光は1万年前のものであり、それゆえ私たちに現在見えるその星の姿は1万年前の姿であるという事実を受け容れるなら、光の速度が有限である限り、どれほど近い距離でもその移動には些少なりとも時間を有するわけであるから、1メートル離れたところにある対象を知覚するとき、その対象は1メートル分だけ以前の姿を現しているということになる。すなわち、現実世界の今この瞬間の知覚はいつも既にして過去の対象を捉えているのであり、その意味で私たちはいつも過去の中に生きているのだ。もちろん、光＝視覚だけでなく、音＝聴覚も必ずや音源と耳の間にはズレがあるので、今この瞬間に聞こえる音はいつも過去の音であるとも言えるだろう。

こうした現在と過去の同時性こそ、哲学が見出すべきベルクソンの屋台骨となる考えである。ベルクソン哲学においては、現働的なものと潜在的なもの、知覚と記憶、あるいは現在と過去は互いに融合し二重化する一つの持続として考えられており、複数のタイプの時間イメージ全てに共通する特徴もこの識別不可能性としての同時性であり、時間イメージの基礎が結晶イメージとされるのはこれゆえである。ドゥルーズは結晶イメージについて次のように述べている。

それは時間の直接的な現前であり、過ぎ去る現在と保存される過去の間に二重化する構成的過程であり、現在と、現在がやがてそれになる過去との厳密な同時性であり、過去と、過去がかつてそれであった現在との厳密な同時性なのである。(Deleuze 1985: 358=2006: 376)

以上を確認し、さらに結晶的体制の特徴を検討していくことにしよう。

## 2 結晶的体制——第三の特徴と第四の特徴

結晶的体制の第三の特徴は、「もはや描写ではなく説話 (narration) にかかわる」(Deleuze 1985: 167=2006: 177)。まずは、これを有機的体制と比べてみよう。「有機的な説話は、感覚運動的な図式の発展である」(Deleuze 1985: 167=2006: 177) と言われるように、有機的体制は状況や環境に対する人物の有用な行動を中心におくことによって、観客に人物の行動や状況の変化を、論理が破綻せず因果が明確な形で提示する。もちろん、人物たちの様々な行動や運動は、「見かけの異常や、断絶や、挿入や、重なりや、解体を数多く生み出すかもしれない、空間の内部における様々な力の中心の配分を促す様々な法則にも従う」(Deleuze 1985: 167=2006: 178) ものであるから、いつも合理的な連結や連関を形成するわけではないし、スクリーンに映し出される空間の様々な部分——例えば、向かい合う二人の人物、現実と夢や回想の情景、前景と後景、対照的な光と影など——が中心の座を求めて拮抗し、対立し、競合することで、ストーリーの合理的な把握においては副次的な部分や取るに足らないはずの部分が必要以上に観客の目を惹くことも多々あるだろう (これこそ、映画カメラの非中枢性がもたらす機械映像の本質である)。



しかし、有機的体制における説話は、人物の行動に整合性や論理性が欠けていても、物語の語られ方や筋道に不自然な部分があっても、感覚運動的な図式を崩壊させることはない。なぜならば、有機的体制は、「どんなに混乱してようと、原理上、時系列的な時間のままである」(Deleuze 1985: 167=2006: 178) からだ。この時系列的な時間の内実については後ほど改めて取り上げるが、ここで着目しておきたいのは、直接的な時間の現前をもたらす結晶的体制の特徴があえて空間の観点から論じられていることである。

ドゥルーズは、有機的体制における空間の特色を、クルト・レヴィンが提起した、主体とその環境の要素群が力学的にも心理学的にも相互に作用し合って形成される具体的な生活空間としての「ホドロジー空間」と、様々な運動を測定可能にする抽象的なユークリッド空間との相補性に、すなわち「生きられたホドロジー的空間と表象されたユークリッド的空間の相補性」(Deleuze 1985: 168=2006: 179) に見ている<sup>3</sup>。これに対して、結晶的体制においてはこうした相補性が完全に棄却された全く別種の空間が様々に創造されるのだが、ドゥルーズはそうした空間の各々を映画作家の固有名とセットにして次のように述べている。

こうした意味でこそ、ブレッソン、ネオ・リアリズム、ヌーヴェル・ヴァーグ、ニューヨーク派におけるリーマン空間や、ロブ＝グリエにおける量子的空間や、レネにおける蓋然的・トポロジー的空間や、ヘルツォークとタルコフスキーにおける結晶化した空間について語ることが可能なのだ。たとえば、諸部分の接続があらかじめ決定されておらず、多様な方法でなされることが可能であるとき、リーマン空間があるということにしよう。それは(ブレッソン風に)切断され、純粋に光学的、音声的で、触知可能で

3 人間と環境との相互作用、相互依存の場(いわゆる生活空間)から派生してくるものとして人間の行動をトポロジーを用いて捉えようとするレヴィンは、トポロジーだけでは賅いきれない部分を「ホドロジー空間」として提起し、例えば以下のように述べている。「トポロジーの空間は、方向、距離、力の概念を包含する力学的な心理学の諸問題を表現するには、“一般的”すぎる。私が“ホドロジーの空間”と呼んでいる多少さらに特殊な幾何学で、それらの問題は取り扱われる。社会—心理学的場においては普通不可能である角度、方向、距離の“測定”を前提とすることなしに、方向の異同、距離の変化をこのような空間によって数学的に正確な仕方で述べることができる」(Lewin 1951: 151=1979: 151)。レヴィンの「ホドロジー空間」は非常にきめ細かい網の目で人間の行動を把握するものであるが、やはり幾何学的で測定可能な空間が前提になっており、ドゥルーズはこれに全面的に賛同することはない。ちなみに、サルトルは即自と対自が織り成す「人間空間」という自らの概念について語るときレヴィンのホドロジー空間を非常に肯定的に援用していること、さらに、オーソン・ウェルズの『市民ケーン』(1941年)に対するサルトルの厳しい非難についてドゥルーズが冷ややかな反応をしていること、それにもかかわらず、ドゥルーズが「非人称的超越論的領野」という概念を創出するにあたってサルトルの思考を大いに養分にしていることを合わせて考察するならば、ドゥルーズとサルトルの微妙な距離を浮かび上がらせることができるのではないだろうか。



さえある空間である。小津やアントニオーニのように、空虚で、無形態で、ユークリッド的な座標を失っている空間もある。もはや結晶の核と結晶化可能な物質しかとどめていない環境の中で風景が幻覚的になるとき、そこには結晶化した空間がある。(Deleuze 1985: 169=2006: 180)

言うまでもなく、これらの空間は時間の直接的現前をそれぞれに表現するものであるのだが、問われるべきは、ドゥルーズ自身「これらの空間を特徴づけるものは、空間に沿ったやり方では説明されえない」と述べながらも、「結晶化した空間」(『時間イメージ』では「結晶」は時間を修飾するための言葉だ)という表現まで用いてなぜあえて時間を空間として扱っているのかということである(Deleuze 1985: 169=2006: 180)。一つには、ベルクソン哲学が主張するように、そもそも空間は時間であるから、より正確に述べれば空間は弛緩した時間であるから、時間を空間として語っても不思議ではないという理由が考えられよう。

これに加えて、物語を合理的に語るために様々な要素や部分が局所化可能なものとして扱われ、整理、整序、整合される有機的体制の空間と異なり、結晶的体制における空間は「位置づけ不可能な諸関係を含んでいる」(Deleuze 1985: 169=2006: 180) こと、その結果として、結晶的体制の「説話は真正であること、つまり、真なるものであると主張することをやめ、本質的に偽なるものになる」(Deleuze 1985: 171=2006: 180) ことをはっきり示すためであるとも考えられるだろう。

しかし、本論が最も重大であるとする理由は、時間の直接的現前を空間として語らなければ、ベルクソンやドゥルーズが強く希求したように哲学と科学を架橋することができないからというものである。ベルクソンやドゥルーズにとって、哲学の本質的な仕事は、科学と交差しその成果と共鳴しながら、科学の思考ではどうしても届かない位相を探究することでこの世界の実相に迫ることである(もちろん、同じ意味で科学は哲学の思考を補うものでなければならないだろう)。だからこそ、ここでドゥルーズは非質料的で形而上的であるはずの時間を、科学が対象とする質料的で形而下的な空間を通じて語るのだ<sup>4</sup>。

4 周知の通り、『シネマ』では「運動イメージ」から「時間イメージ」へ転換する境界線に、「何らかの空間 (espace quelconque)」が設定されている。これは運動イメージの空間性から脱却して、純粋な時間イメージに至る直前の萌芽状態、もしくは常識的に言えば「空間」とはもはや呼ぶことはできず時間イメージへ生成した特異な「空間」であるが、ここでもドゥルーズは時間をあえて空間で表現しようとしていることが分かる。

さらに、運動に従属しない時間それ自体をリーマン幾何学、量子論、トポロジーなどの知見を用いて科学が思考しようとするのは、科学の思考も究極的には哲学が探究すべき方向に向かっていくことの証でもある。二つの思考は決して平行線を辿るわけでも反対に進むわけでもなく、あるいは、たとえそうであっても、どこかで行き交い響き合うのだ。それゆえ、ここでドゥルーズが科学の用語を用いているにしても、それは当然のことながら、哲学が自らを飾り立てるために科学の知見を都合よく我田引水しているわけではないことを確認しておかなければならない。ドゥルーズは科学の領域にあえて足を踏み込むことの危険と、それにもかかわらず哲学がそうしなければならない理由を次のように語っている。

もちろん私たちは、科学的な規定を科学の領域の外部で引き合いに出すことの危険は承知している。それは抽象的な隠喩に陥ることの危険であり、あるいは、骨の折れる応用にかかずらうことの危険である。とはいえおそらく、科学的な操作から概念化可能な特定の性格を引き出すことだけに留めておけば、この性格が科学的でない様々な領域に差し向けられ、応用にも隠喩にも訴えることなしに科学と同一の点に向かうことになり、右のような危険はなくなる。(Deleuze 1985: 169=2006: 179-180)

時間の直接的現前はこうした留保と慎みをもって、現代の諸科学の思考の極限において垣間見られることになる空間として論じられているのだ(このような哲学と科学の出会いが映画という芸術において表現されていること、あるいはその出会いを映画という新たな思考が表現していることを明らかにした点は、「哲学と映画のまれに見る婚姻」(Deleuze 1985: 272=2006: 290)の大きな成果の一つであると考えられる)。

さて、科学の知見を通じて見いだされる様々な空間は、合理的で常識的な説話の話法や人物の感覚運動的な図式を成立させるために構成されることをやめる。断裂し、断片化し、諸々の部分の位置が固定されず、それらが結ぶ関係も定まることがなくなり、「必然的に「偽」の運動を引き起こす」ようになるそのとき、結晶的体制の第四の特徴が生じることになる。それは、「時間はずねに真理という観念を危機に曝すものであったことがわかる」という事態である(Deleuze 1985: 169-170=2006: 180-181)。その結果、焦点は感覚運動的な図式の発展に関わる説話から、「一般的に主体-客体の関係とこの関係の発展とに関わる」(Deleuze

1985: 192=2006: 206) 物語 (récit) へと移ることになる。もちろん、描写においても主体-客体の構図は崩壊させられていたが、それはあくまで一つのショット、一つのシーン、あるいは一つのシークエンスにおけるものであった。しかし、ここにおいては一つの作品全体を貫く物語それ自体に危機が到来しているのだ。有機的体制の物語においては、「真理というモデルは、もはや感覚運動的な連結においてではなく、主体と客体との「一致」において十全な表現を見出す」(Deleuze 1985: 192=2006: 206) のに対し、結晶的体制は物語を次のように変成させる。

物語はもはや、それ自身の真正さをなしている真なるものという理想に関わるのではなく、「擬似的物語」、詩、擬装する物語、あるいはむしろ物語という擬装になる。主観的なイメージと客観的なイメージはその区別を失うだけでなく、その一体化も不可能になり、新たな回路が生まれ、この回路の中で二つのイメージはまるごとおきかわり、伝染し合い、分離し、あるいは再結合する。(Deleuze 1985: 194=2006: 207-208)

このように偽なる説話は擬装する物語へと引き継がれることになるが、この第三と第四の特徴において全面的に展開されることになるのが「偽なるものの力能」である。これは真理を脅かすものとしての時間、「時間そのものという犯罪以外に犯罪はない」とまで言われる時間、「全体としての」、「無限の開かれ」としての時間であり、身体的運動性によって定義されるあらゆる標準的運動に先行する時間」が有機的体制を統御する真理(=正しさや合理性)を失効させる力能とされる(Deleuze 1985: 54=2006: 51)。

### 3 真理と偽なるものの力能

しかし、偽なるものの力能とは結局のところ思考に何をもたらすのだろうか。真理(以下、これを真理1とする)が危機に曝されることになったとして、偽なるものや偽造者が、あるいは間違いや嘘や虚構や誤謬や錯覚とされてきたものが「正しい」ものになるということなのだろうか。あるいは、偽なるもの(以下、これを偽なるもの1とする)が新たな真理(以下、これを真理2とする)になるということであろうか。そうであれば、真理1が危機に曝され偽なるもの1が真理

2として立ち上がるということになるが、この真理2に対する偽なるもの（以下、これを偽なるもの2とする）が立ち上がるならそれはどのようなものか。偽なるもの2は最初にあった真理1としてその座を奪い返すものなのか、それとも真理2として措定された偽なるもの1の「偽なるもの」なのだろうか。前者（パターンAとする）であれば、それは「真理」の座を奪い合う二者の対立図式であり、後者（パターンBとする）を認めるならば、偽なるもの2は真理3として、そして真理3の「偽なるもの」は偽なるもの3へと変成し、これが真理4として措定され、この連鎖は原理的に果てなく続くことになる。パターンAとパターンBをそれぞれ図示すると以下のようなになるだろう（Vは「真理」、Fは「偽なるもの」を表す）。

〈パターンA〉

$$V1 \rightarrow F1 = V2 \Leftrightarrow V1 \rightarrow F1 = V2 \Leftrightarrow V1 \cdots$$

〈パターンB〉

$$V1 \rightarrow F1 = V2 \rightarrow F2 = V3 \rightarrow F3 = V4 \rightarrow F4 = V5 \rightarrow F5 = V6 \rightarrow F6 = \\ V7 \cdots$$

〈パターンA〉の場合は、V1とV2の二項対立であるが、これに弁証法的な運動を与えて、 $V1 \rightarrow F1 = V2 \Leftrightarrow V1' \rightarrow F1' = V2' \Leftrightarrow V1'' \rightarrow F1'' \cdots$ と止揚させていったとしても本質は変わらない。〈パターンB〉の場合は、真／偽の連鎖が無限に続いていくことで、真理とされていたものがたちどころに偽なるものであることが判明し、真理というものが徹底的に解体される結果、実体やオリジナル、あるいは仮面の下の本当の顔などというものはなく、全ては仮面であり、偽装であり、本体のない分身であり、シミュラクルであり、もし真理があるように見えるならそれはこれらの偽なるものたちの反復がそう見せているだけであり、真理とは偽なるものたちによって捏造されたものなのだ……といった話に落ち着くことになるだろう。

しかし、〈パターンB〉において一步踏みとどまって考えるべきなのは、偽なるものが偽なるものであるには常に真理に照合されなければいけないこと、つまりそもそも真理がなければ偽なるものもないということである。もちろん、偽なるものによって真理が捏造されるなら、そもそもの始まりにあるのは偽なるものであるとも言えるが、ここで考えるべきは「偽なるもの」という概念や発想それ自

体に「真なるもの」が既にして含まれているということである。つまり、「真／偽」はそれぞれ独立した項と項の対ではなく、いわば「真（偽）」であり、「（真）偽」とでも表すほかにように、それ自体が「偽」を含む「真」であると同時に「真」を含む「偽」という一つの項なのである。

これに対して、ここで導入される偽なるものの力能は、真／偽の矛盾律や排中律を超出しており、真とも、そして（真と相関的な）偽とすらも無縁の力能である。しかし、そもそもそのような力能などありうるのだろうか。あるとするならば、何に由来し思考に何をもたらすのか。ドゥルーズは、真と相関関係にある偽の力能は、感覚運動的図式や紋切り型、あるいは定型やクリシェを裏切ることで、目新しいイメージを生み出すことができるにしても、それが真の創造につながることはないと言っている。

確かに勝利をおさめるには、紋切り型をパロディーにするだけでは不十分であり、それに穴をあけ、それを空にするのでさえも不十分である。感覚運動的脈絡を阻止するだけでは不十分なのだ。光学的－音声的イメージに、単に知的なあるいは社会的な意識の力ではない、深い生命的な直観の法外な力を付け加えなければならない。（Deleuze 1985: 33-34=2006: 29）

ドゥルーズにとって、真／偽とは無縁の偽なるものの力能は単なる知性という能力でもなければ、一般意思や社会規範の如きものを形成する力でもなく、世界を遍く貫く根源的な生命の力に由来するものである。生命それ自体は、質料に内在し質料を自らの奔流に引き込み、やがて質料を通り抜けていく純粋に非質料的な波動といったものであり、これを一切の質料を介さずに——つまり、生物個体や生物種を介さずに——十全に把握するには、純粋な形而上的次元に達することのできる思考が要請される。哲学の役割は、世界の実相を明らかにし、生命それ自体の力を私たちに取り戻すことであるが、そのためには、真／偽に基づく法の圏域を突破する「深い生命的な直観」が、心身を制限し萎縮させ衰弱させてしまう正しさや誤りという規範や価値を無効にする「法外な力」が必要となる。だからこそ結晶的体制の第一と第二の特徴である「光学的－音声的イメージ」に、第三と第四の特徴の要石となる「偽なるものの力能」が導入されなければならない。こうした事情を『シネマ』の記述に沿っていまいし詳しく見ておこう。

ドゥルーズは、真理について主に「裁きの問題」という観点から論じているの

だが<sup>5</sup>、この「もはや真理はなく、様々な外見があるだけ」という事態を「外見についての、また偽のイメージについての最も偉大な映画作家」としてのアメリカ時代のフリッツ・ラングやラングと協働したブレヒトを例に出しながら説明している (Deleuze 1985: 180=2006: 192-193)。しかし、着目すべきは、様々な外見は自らが真なるものではないことを露わにしながらも、やはりそれら外見のなかから「裁きは「最も優れた」観点を表出する」こと、すなわち、たとえ絶対的な真理は消失するにしても、裁きはそれでも相対的に最大の真理を選び出して生を裁き、「より優れた価値をもつ個人や人間に味方する可能性がある」ことである。結局のところ、「ブレヒトにあってもラングにあっても、裁きの体系は、危機を被ると同時に、救われ、変容する」というところで留まり、真理が完全に消失し裁きの体系が解体されることはないとされる (Deleuze 1985: 180-181=2006: 193-194)。しかし、実のところ結晶的体制の第四の特徴は、単に「真理という観念を危機にさらすものであった」だけではなく、「真理の危機にけりをつけ、偽なるものとその芸術的で創造的な力能をそれに取って代えようとする」(Deleuze 1985: 172=2006: 183) ことにある (ドゥルーズによれば、これを宣言したのがニーチェその人である)。

時間の直接的イメージをもたらし偽なるものの力能は、真／偽という矛盾律あるいは排中律とは無縁の力能であるゆえに、生を裁くための真理に照らされる誤謬でも錯誤でも幻覚でも仮面でも偽装でもない。重々しい真理の軛からも、真理と表裏一体となっている外見とも無関係の偽なるものの力能の本姓とは、生を「様々な外見からも、真理からも解放」(Deleuze 1985: 189=2006: 202) し、生に「生成の無垢」(Deleuze 1985: 185=2006: 198) をもたらし、善悪の彼岸へと至らせることにある。もちろん、ここでいう無垢というのはそれ自体が正しいものでも間違っただけのものでもなく、むしろ正しさや過ちを一切帯びることのない中立的で、無感動で、非人称的なものであろう。また、善悪の彼岸とは、「少なくとも、良いものと悪いものの彼岸を意味するものではない」。良いものも悪いものも、真理や真正さに照らされて裁かれたり棄却されたりするのではなく、生の諸々の

5 その理由は、真理や正しさや真正さは真偽、善悪、有罪無罪などの判定基準になるからであり、あるいはむしろ、そこから偽や悪や罪という観念が生じてくる道徳的根拠であるとも言えるからである (「真正な人は結局、生を裁くこと以外のことは望まず、より優れた価値や善を打ち立て、そうしたものの中に裁くことができる。真正な人は裁くことに飢えており、人生のうちに悪を、贖うべき過ちを見て取る。それこそ、真理という観念の道徳的な起源である」(Deleuze 1985: 179-180=2006: 192))。

力の質を高めるか、低めるかによって区別されるだけであり、両者とも生成であることに変わりはない。良いものと悪いものの「いずれにも真理はない。生成しかない」のであり、生成とは生という偽なるものの力能、力能への意志である」からだ (Deleuze 1985: 185=2006: 197)。このとき、映画における物語は、現実 (真実) とフィクションという相互依存的で相補的なモデルを忌避し、「こうしたモデルに対立する純然たる、簡潔な仮構作用の機能」を、つまり、「偽なるものに対して、一つの記憶、伝説、怪物になる力能を与える」仮構作用の機能を全面的に導き入れることで (Deleuze 1985: 196=2006: 209-210)、「擬装する物語、物語の擬装、擬装の物語」 (Deleuze 1985: 200=2006: 214) と化する。

繰り返すが、こうした擬装はもはや真／偽の矛盾律や排中律とは全く無縁である (この点を見誤ると仮構作用の仮構性の意味を捉え損ねることになるだろう)。そうした擬装の物語においては、人物は感覚運動的な図式に拠って行動するどころか、もはや自己の同一性さえ喪失し他者へと変成し続けることになるし (「人物は、決してフィクションになることなく作り話を始めるとき、自ら他者となる」 (Deleuze 1985: 196=2006: 210))、スクリーン上に展開されるイメージの連続がどこで区切られるべきかが不明瞭になり、区切られるべきある任意の時点にその前と後が同時に含まれることで「区切り」そのものが一つの連続態として出現することにもなる。

以上が結晶的体制 (時間の直接的イメージ) の四つの主要な特徴である。後ほど整理するが、これら四つの特徴は描写、説話、物語という三つの「審級」 (Deleuze 1985: 192=2006: 205) に緩やかに対応していることも確認しておきたい。

## 4 四つの時間の在り方と非時系列的な時間

結晶的体制は時間の直接的現前、すなわち、もはや運動に従属することのない時間の本性を表現するとされるが、ここで根本的な問いが浮かび上がる。そもそも時間の本性が直接的に現前するとき、それはなぜこれらの特徴と関係するのか。また、なぜ時間イメージは偽なるものの力能と結びつくのか。要するに、なぜ「結晶の形成と時間の力と偽なるものの力能とは、イメージの新たな座標として、厳密に相補的であり、たえず互いを前提し合う」 (Deleuze 1985: 172=2006: 184) とされるのであろうか。



こうした問いを解明するために、まず以下に『シネマ』における時間の本性の内実を結晶的体制と対応する四つの時間の在り方として把握し直す。次に、これら四つの時間の在り方の基礎となる「非時系列的な時間」が意味している事態を明らかにすることで、『シネマ』において偽なるものの力能が導入されなければならない根本的な理由を示す。

『シネマ』において、時間の本性たる「時間の力」は次の三つの形で直接的に現前するとされている。すなわち、①「潜在的な過去の諸層の共存」と②「脱現働化された現在の諸々の頂点<sup>ピーク</sup>の同時性」(Deleuze 1985: 137=2006: 145)、そして③「系列としての時間」(Deleuze 1985: 359=2006: 378)である<sup>6</sup>。これらは三種類の時間イメージを通じて表現されることになるのだが、ドゥルーズはそれらの時間イメージを「時間の秩序」と「時間の系列」という二種類の「時間記号(chronosigne)」によって区別している。

三つの時間イメージに共通するのは、間接的な表象から断絶していることだけでなく、時間の経験的な流れや連続、時系列的な連続性、前と後との切断を退けることである。したがって、これら三つの時間イメージは互いに通じ合い、浸透し合うのであるが(ウェルズ、レネ、ゴダール、ロブ＝グリエ)、同じ一つの活動のうちに自らの記号の区別を存続させている。(Deleuze 1985: 202=2006: 216-217)

三つのイメージと二つの時間記号の照応関係を整理してみると、まず「時間の秩序」を表す時間記号は「位相(アスペクト)」と「観点(アクセント)」という二つに分岐することで各々①と②に、そして「時間の系列」を表す時間記号が③に照応することになる<sup>7</sup>。また、前節の結晶的体制の特徴と関連付けるならば、「時間

6 ②の原語は「la simultanéité de pointes de présent désactualisé」であり、邦訳では「脱現働化された現在の諸先端の同時性」である。pointeは確かに「先端」を意味するが、この時間の在り方は『シネマ』においてはロブ＝グリエの作品と密接に結びつく形で論述されること、そしてロブ＝グリエの作品は「量子的空間」を表すと言われていることを勘案すれば、②は量子力学との関連で捉えるべきであるように思われる。すなわち、この場合のpointeは、波動関数によって表現されそれ自体は局所化不可能な波の諸々の頂点を指していると考えられる(ちなみに、英訳でもpointeはpeakとなっている)。「先端<sup>ピーク</sup>」と解すると、波や波動との親和性がやや減じてしまう恐れがあることから、本論ではとりあえずの試訳として「頂点」とした。

7 付言しておくならば、「時間の系列」を表す二つ目の時間記号は、「生成記号(génésigne)」とも言い換えられることになる。なぜならば、「直接的な時間イメージはここで共存または同時性の秩序において現れるのではなく、潜勢化としての、諸力能の系列としての生成変化において現れる」とされるからである(Deleuze 1985: 359=2006: 378)。注意しておきたいのは、「時間の系列」はあくまで「非時系列的な時間」としての時間イメージにおいて表現されるのであって、単なる時系列的な時間の意味していないということである。だから、ドゥルーズが主にゴダールなどを援

の秩序」は第三の特徴と、「時間の系列」は第四の特徴と大まかに相関する。

さらに、この相関関係をより見通しのよいものにするために、第一の特徴と第二の特徴にも言及しておくならば、それらは時間の直接的イメージの開闢であると同時に根本でもある結晶イメージと相関していると言える。結晶イメージは、行動へ向かう回路が遮断され、現働的なイメージと潜在的なイメージが互いに重なり合うことで識別不可能になるイメージであり、先述したような現在と過去の同時性としての結晶化した時間を表現する。ドゥルーズはこの「現働的なものと潜在的なものとの識別不可能性から、新たな区別が、以前は存在しなかった新たな現実であるかのように出てこなければならない」(Deleuze 1985: 116=2006: 120)と述べているが、この新たな区別こそが①～③であると考えられる。すなわち、現在と過去の同時性こそ時間の力が顕現する嚆矢であり、①～③の時間の存在様態は全て結晶化した時間から展開してくるということである。その意味で結晶イメージが表現する結晶化した時間(=現在と過去の識別不可能性としての同時性)は①～③を通徹する④と考えることもできよう。また、この結晶イメージと結晶化した時間に対応する記号は、「光記号／視覚記号(opsigne)」から進展してきた「ガラス記号(hyalosigne)」、あるいは「結晶記号(signe cristallin)」であり、「時間の秩序」と「時間の系列」はこれら結晶に関わる記号から生じるとされる。

直接的な時間イメージあるいは時間の超越論的形態、まさにそれを私たちは結晶の中に見る。いずれにしてもガラス記号、結晶記号は時間の鏡あるいは胚種と言われるべきである。ここから時間記号が生まれ、直接的な時間イメージの様々な現前を表出する。(Deleuze 1985: 358-359=2006: 377)

ここからも、結晶イメージ、結晶化した時間、結晶記号が、時間の本性をめぐって展開される三種類の時間イメージ、三種類の時間の在り方、二種類の時間記号の胚種として通貫していることが理解されよう。さらに、ドゥルーズは、①～③の時間イメージを創造する代表的作家として、それぞれオーソン・ウェルズ(=④)、レネ(=①)、ロブ＝グリエ(=②)、ゴダール(=③)を割り当てている。

用しながら断片や切断などを強調したとしても、それはいわゆる不連続の連続ということの意味しているのではなく、非時系列的な時間においてしか創出できない系列性を追究しているのである。

①	純粋な光学的音声の状況	現実や実物ではなく、描写を対象とする描写	結晶 (過去と現在の同時性)	オーソン・ウェルズ
②	現働的なイメージと潜在的なイメージとの識別不可能性			
③	科学の知見を通じて見いだされる様々な空間	偽る説話	時間の秩序① アスペクト＝位相 「潜在的な過去の諸層の共存」	アラン・レネ
			時間の秩序② アクセント＝観点 「脱現働化された現在の諸々の頂点の同時性」	アラン・ロブ＝グリエ
④	危機にさらされる真理＝偽なるものの力能	擬装する物語	時間の系列 「系列としての時間」	ジャン＝リュック・ゴダール

ここまでを前節の結晶的体制の特徴と審級も合わせて整理したものが、上の図表である<sup>8</sup>。

さて、立てられるべき問いは、なぜ「結晶の形成と時間の力と偽なるものの力能とは、イメージの新たな座標として、厳密に相補的であり、たえず互いを前提し合う」のかというものであった。比較的理解しやすいのは結晶と時間の関係であろう。現働のイメージと潜在的イメージが識別不可能になり、「何が想像か現実か、何が物理的か心的か分からなくなる」(Deleuze 1985: 15=2006: 10) 結晶イメージは、そのまま過去と現在の同時性として在る結晶化した時間を表していることから、結晶と時間が「互いを前提し合う」と考えるのは自然な流れであると思われる。

しかし、時間と偽なるものの力能、あるいは時間と真理の関係についてはどうだろうか。本来的な時間の在り方はいかなる意味において偽なるものの力能と関わるのだろうか。先ほど結晶的体制の第三と第四の特徴として偽る説話や擬装する物語を見たが、そもそも時間がなぜ真偽問題と関わるのか、なぜ時間は「真と

8 もちろん、こうした図表はあくまで便宜的で一時的なものでしかない。例えば、記号については「思惟記号」や「音記号」などここに含まれないものが幾つもあるし、描写、説話、物語という三つの審級はやがて四つになるからである。すなわち、「映画はもはや物語的ではなくなる。しかしゴダールとともにそれは最も「小説的 (romanesque)」になる」(Deleuze 1985: 202=2006: 216-217)。映画が小説的になることの意味については、音声や言語の影響がいつそう強くなることと関わるが、これについては他日を期したい。

偽というはるかに恐ろしい領域」(Deleuze 1985: 137=2006: 145) と関係するのか。この点を明確にしなければ、『シネマ』が形而上学の書物として書かれた意義を十全に解き明かすことはできないだろう。

まず、時間の力を表現する時間イメージ(①～③)に共通する最大の特徴は、時系列的な時間の崩壊であり、つまりは非時系列的な時間である。これは、『シネマ』において何度も繰り返される指摘であるが、ここで立ち止まって考えてみたいのは、「時系列」や「非時系列」という言葉の意味である。ごく単純に考えるならば、「時系列」ということで理解されているのは、ある事象や現象を時間的推移にしたがって認識、測定することで、各々の時点の離散的状态を知性の作用によって連続した一つの流れとして仕立て上げた系列のことであろう。そうした時系列がいわゆる「線形」であるなら、非時系列は「非線形」と親和性があると考えられる。そうであれば、非時系列的な時間とは、時系列上の様々な状態(各々の点=瞬間)が時間の推移や先後関係に従うこともなければ、ユークリッド空間に基づく比例関係や正則といったものを作り出すこともない時間ということになるだろう。

しかし、時間イメージと連動する非時系列的な時間の「非時系列」の意味はこれに留まるだけではない。なぜならば、順序がランダムであったり、不規則であったり、乱雑になったりする事態は、まだ時間の間接的表現(すなわち、運動イメージ)の圏内にある回想イメージや夢イメージでも生起するからである。

回想イメージはフラッシュバックという技法の根拠となる「時間の分岐のそれぞれの点」、すなわち、「たえず新たな「屈曲」、新たな因果性の断絶をもたらし、それがまた非-線形的関係の集合の中で、先行する断絶とともに分岐する」(Deleuze 1985: 68-69=2006: 67-68) 事態を表現し、夢イメージは現実「あるときは過剰、複雑化、過飽和であり、またあるときは逆に、削除、省略、断絶、切断、離脱」(Deleuze 1985: 79=2006: 80) といった加工を施したイメージであるとされ、その意味でこれら二つのイメージとも事柄の順序や順番は不確定、不規則、不均整となる。

もちろん、回想イメージは現在の適切な行動に合うような形で思い出せない場合は「運動的延長」に至ることはないし、夢イメージは睡眠者が様々な感覚を有していても、もはや現実的な感覚運動的な回路と接続することはない。要するに、両者とも「運動的延長を失っている」(Deleuze 1985: 76=2006: 76-77) のであり、その意味で直接的な時間イメージとして考えられてもよいように思われる。

しかし、どれほど分岐、断絶、非一線形などの言葉で彩られたとしても、これらは依然として時系列的な時間のうちにしかないのである。

ところが回想イメージは潜在的ではなく、潜在性を（ペルクソンはそれを「純粹回想」と呼ぶ）自分のために現働化するのである。それゆえに回想イメージは、私たちに過去を手渡すことはなく、過去が「かつてそうであった」古い現在をただ表象するのである。回想イメージは、現働化したイメージ、あるいは現働化の過程にあるイメージであり、現働的な現在のイメージとともに識別不可能な回路を形成することはない。（Deleuze 1985: 74-75=2006: 75）

また、夢イメージにおいて、現働的なものと潜在的なものが形成する回路は、身体による有用な行動と切り離されるゆえに、覚醒時よりもいっそう潜在的なものの領域へ深まっていくことになるとはいえ、次のように論じられている。

その回路において、各イメージは先行するイメージを現働化し、さらに後続するイメージにおいて現働化され、場合によっては最初の状況へと帰ることになる。したがって回想イメージと同様、この回路は現実的なものと想像的なものの識別不可能性を成立させない。夢は夢を見る者に帰属し、夢の意識（現実的なもの）は観客に帰属するという条件に夢イメージは従っている。（Deleuze 1985: 80=2006: 80-81）

これらの記述から、時間イメージの必要条件を照射することができるだろう。すなわち、時間の本性は純粹回想として在り、過去は古い現在ではなく、潜在的な過去は現在の知覚に現働化されるとしてもその潜在性が汲み尽くされることはないということである。また、「潜在的イメージ（純粹回想）は、心理状態や意識ではない」（Deleuze 1985: 107=2006: 110）と言われるように、純粹回想は個人の回想ではなく、むしろ個人の意識や記憶を超出し、主体とされていた人物がそこから個体化する世界それ自体である。人物が自らの心や精神や、あるいは脳の中にある記憶を思い出すのではなく、世界－記憶の中に人物が存在するというように事態は逆転する。すなわち、「唯一の主観性とは時間であり、根底で捉えられた、非時系列な時間であり、われわれは時間の内部にいたのであって、その逆で

はない」(Deleuze 1985: 110=2006: 113) ということだ。

こうした意味で、時間イメージが表現する非時系列的な時間の非時系列性とは、単に順序や順番がランダムであるとか、不整合的、あるいは離散的で不連続であるといった意味で言われているのではないことが分かるだろう。非時系列性とはまずもって、汲み尽くされることのない潜在性に満ちた世界の在り方そのものであり、個人や個体のスケールを越えるどころか、むしろ個人や個体がそこで多様なリズムを刻みながら生まれて、生きて、死んでいくそれ自体は途切れることも消えることもなく、一切を保存する持続の本性のことを言うのである。

## 5 可能性という様相

上記の非時系列性を前提にした上で、時系列的な時間の時系列性について考察してみよう。これを解く鍵は、命題の真偽のみが焦点となる二値論理学ではなく、「可能」「不可能」「必然」「偶然」といった様相を考察する様相論理学であると考えられる。ただし、最終的に『シネマ』で援用されるのは通常の様相論理学ではなく、「発明すべき新しい論理学」(Deleuze 1985: 359=2006: 377) であることを予め指摘しておき、その点に留意した上で、時間と偽なるものの力能と様相の相互関係を見ていこう。また、本論ではとりわけ「可能性」に焦点を当てて時間と偽なるものの力能との関係を解明していくことも付言しておきたい。なぜならば、偽なるものの力能を通じて見出される「高貴なエネルギー」としての「良いもの」は「常に生きる力能を増し、常に新たな「可能性」を開く」のであり、このエネルギーがもたらす「逆る生成においては、力能への意志は芸術家たることの欲求、あるいは「与える徳」、新たな可能性の創造である」とされているからである (Deleuze 1985: 185=2006: 197)。

さて、時間と偽なるものの力能、そして可能性との間にはいかなる関係があるか。まず、時系列的な時間は、現実＝現在を基軸にする時制システムを構成していることを確認しておこう。これは、現在は過ぎ去ってそれまでは未来であった新しい現在がそれに取って代わり、その過ぎ去った現在は古い現在としての過去になるという考え方に基づいている。これを未来の側から述べるなら、未来はやがて現在となり、その現在はさらなる未来が現在になることで、現在の立場を追われ古い現在としての過去になるということであり、過去の側から述べるなら、

かつて未来であった現在はやがて古い現在としての過去になるが、この古い現在はそれ以前の古い現在よりは新しく、自分より後にやってくる古い現在よりも古い、ということになるだろう。要するに、現在は絶えず新しい現在（＝先ほどまでの未来）に取って代われ、取って代わられた古い現在（＝先ほどまでの現在）は過去として過ぎ去って消えていくということである。

現在を介して未来はやがて過去になるし、過去はいつかの未来であった……という時間図式は、時間とは継起する現在として順々に推移していく事態であるということを表しているが、注目すべきはそれに加えて、過去、現在、未来が全て等質的で一様であるということも含意されているということである。それらが等質でなければ、過去を古い現在として、未来をやがてくる現在として、現在の下に包括することはできないからである。ここから、ドゥルーズが時系列的な時間を忌避するのは、ただ事象や現象が時間の進行に合わせて順々に推移するからというだけではなく、継起する現在が時間軸上の全ての時点を自らと等質のものとして統御するからでもあることが見えてくる。だからこそ、ドゥルーズは「問題なのは、映画イメージが現在に、必然的に現在に属しているとする明証性である」（Deleuze 1985: 54=2006: 51-52）と述べ、これを「映画のあらゆる理解にとって破壊的なありきたりの観念」（Deleuze 1985: 355=2006: 372）として断じているのである。

このような継起する現在が支配する時制システムが徹底されるとき、真理という位相において何が起こるだろうか。結論から述べるなら、「可能」という様相が無効になってしまい、結果として世界の在り方は真か偽かの二値論理学の範囲に収まることになる。つまり、あらゆる事象や事態はそれが生じる（生じた）か生じない（生じなかった）か、そうであるかそうでないか、といった排中律において把握され、それについての言明や認識は真か偽としてのみ判定されることになるということだ。

また、ある事象が「生じるかもしれない（生じるかもしれない）／生じないかもしれない（生じなかったかもしれない）」という可能性が廃絶されることで、「偶然」という様相が入り込む余地がなくなり、その事象が実際に生じるにしても生じないにしても、それは紛れのない「必然的真理」として捉えられるようになる。以下に可能性という様相が無用となり様相から消散してしまう経緯を、古代ギリシア、ヘレニズム時代初頭のディオドロス・クロノスの様相理論、すなわちストア派にも影響を与えた「支配する者の議論（マスター・アーギュメント）」



を参照しながら考察してみよう。

脇條靖弘によれば、「ディオドロスの様相理論において、必然性の本性は「今後常に真である」ことにある。同様に、不可能性の本性は「今後常に偽である」ことなのである。彼の理論によれば、命題の真理値だけでなく様相的特性も時間に相關的である」（脇條 2014: 71）。それゆえ、例えば「海戦があった」という命題は、その海戦が生じる前においては必然でも不可能でもないが（その時点では単に偽であると判断されるだけである）、実際に海戦が生じた後はこの命題は「今後常に真である」ので（過去の事実の変更も取り消しも不可能なので）、必然を表すことになる。

さて、この理論が様々な議論を呼んだ原因は、「反実可能性（一度も実現しない可能性、今後実現しない可能性の両方を含めて）の拒否」（脇條 2014: 75）にあった。すなわち、ある時点「 $t$ より後のどの時点でも現実に生じない出来事についてそれが生じると言う命題は（偽であるだけでなく）不可能である」ということから、「こうであるかもしれない」、「こうなっていたかもしれない」、「こうなるかもしれない」といった可能性に定位する命題は現実の事実性に照らすと偽となって、一切の可能性が入り込む余地はなくなるとされるのだ。例えば、外国旅行に一度も行くことがない生涯を送った人物がいたとして、その人が生きているあいだ、「もしかしたら外国旅行に行くことになるかもしれないという可能性がある」とか、「そうした可能性が常にその人の人生に内在している（本人に自覚があるうがなからうが）」という命題は常に誤りであったということである。もちろん、「結局、海外旅行に行くことはない人生だった」ということが分かるのはその生涯が閉じた後であって、その人が存命中であれば、少なくとも「海外旅行に行くかもしれない」は未来の可能性としては肯定されるように思われる。しかし、「支配する者の議論」に従うならば、「あるかもしれない／ないかもしれない」という可能性という様相自体が拒否されているのであり、未来に向けた可能性もまた消失するのである。なぜそのような結論に至るのか、以下にその論理を辿ってみよう。

入不二基義は時間の推移や時系列的な時間に着目しながら、「支配する者の議論」を再構成し、以下のテーゼ1とテーゼ2を受け入れるならば、テーゼ3は棄却されると述べている（入不二 2015: 149-152）。

テーゼ1 過去についての真なる命題はすべて必然である。

テーゼ2 不可能なことは、可能なことから生まれない。

テーゼ3 いま真でもなく、これから真になるのでもないような可能なことが存在する。

テーゼ1は、過去は取り消しも変更も不可能な厳然たる事実であり、そのことについての正しい言明（例えば、昨日雨が降ったとして、「昨日雨が降った」という言明は真である）は、それ以外のことが起こりえなかったという点で、つまり偶然の要素を排している点で必然であると解される。

テーゼ2は以下のような手順で解される。まず、常識的には、未来の事柄、つまり現在において思い描かれた可能なものは「生じるかもしれないし、生じないかもしれない」ものであるが、それが生じた後では「生じない」ということはありえず、実際に生じなかったならば「生じる」ということはありえない。すなわち、可能（＝二つのどちらでもありうる）から不可能（＝どちらか一方にはなりえない）が帰結する、あるいは可能が時間を経て不可能になったと考えられるだろう。別の言い方をすれば、実際に生じた事柄は「生じるかもしれないし、生じないかもしれない」状態を経て生じたのだから、生じた事柄はいつも「生じなかったかもしれない」という可能性を纏い続けた偶然的事態であるし、未来に生じる事柄はいつも「生じるかもしれないし、生じないかもしれない」様態であり続け、可能性は可能性として実在し続けることになる。

しかし、このような一見すると常識的で当たり障りのない見解には困難がついてまわることになる。ドゥルーズは次のように述べている。

海戦が明日起こりうるというのが真であれば、次の二つの帰結のうちの一つをいかにして避ければよいのか。つまり、不可能が可能から生じる（というのは、海戦が起これば、もはや起こらなかったことはありえないから）、もしくは、過去は必然的な真ではない（というのは、起こらないことが可能であったから）という二つの帰結である。この逆説を詭弁といって片付けるのは容易である。これは逆説であるといっても、真理が時間の形態に対してもつ直接的な関係を考えることの難しさを示しており、真なるものを、実際に存在するものからは隔たった、永遠なるもの、あるいは永遠を模倣するもののうちに閉じ込めることを余儀なくさせる。（Deleuze 1985: 170=2006: 181-182）

すなわち、可能性という様相が働くことで、真理と揺るがしがたい事実との絆に絶えず疑義が生じざるをえないことになるのである。ここで、「支配する者の議論」は、真なるものが実際に存在するものと合致させるために、すなわち不可能が可能から生じないようにするために（テーゼ2）、そして過去が必然的に真であるようにするために（テーゼ1）、可能性を廃絶する方向に舵を切ることになる。すなわち、「すでに現実になっているか、これから現実になることだけが、可能なことであって、現実にならない可能なことなどありえない」（入不二 2015: 150）という結論を導くのである。

「支配する者の議論」では、ある事象Pについて、Pが生じる以前の未来命題「Pが生じるだろう」は「生じることもありうるし、生じないこともありうる」という可能性や不確定性を含意して言われているのではなく、実際にPが生じるのであれば、それはそもそも生じるべくして生じるものとして言われており、反対に、実際にPが生じないのであれば、「Pは生じないだろう」という未来命題は、Pがそもそも生じようのないものとして言われていると解される。実現する事象は実現以前からいずれ実現するものとして確定しており、実現不可能な事象はどの時点においても一切の実現可能性を帯びることはなく、要するに、不可能でないものとしての可能なものは必ず実現するという必然性が世界を全面的に覆うことになるということだ。それゆえ、可能なものは可能なものからしか、不可能なものは不可能なものからしか帰結しないし、可能なものが不可能になり、不可能なものが可能になるということとはなくなり、結果として生じる事象も生じない事象も必然であり「生じるかもしれないし、生じないかもしれない」、「どちらでも（どれでも）ありうる」という可能性の様相は消去されるのである。

これは常識的な見解からすると驚きであり、あるいは強弁であると非難されることもあるだろう。しかし、事態を丁寧に眺めてみると、実はテーゼ2を成立させる根拠はまさにこの常識的な見解を非常識なまでに徹底することでもたらされているのだ。すなわち、テーゼ2は時系列的な時間の在り方、つまり未来はやがて現在になり、その現在は古い現在としての過去になって過ぎ去っていくという等質的で一般的な時間の在り方を言葉通りに受けとった結果として導出されているのである。例えば、いまPが生じたのであれば、Pが生じたその現在は、「やがてPが生じることになる未来」であつたし、時間の経過とともに「かつてPが生じた古い現在としての過去」になっていく。ということは、このPの未来から過去に至るどの時点においても「Pが起きないかもしれない」という可能性が差し挟まれ

ることはなかったわけで、それゆえ、命題「Pは起きないだろう／起きない／起きなかった」はどの時点においても偽であり不可能であるということだ。以上のように、時系列的時間の時系列性は可能性を廃絶させ、必然が世界を覆う事態を不可避的に引き起こすものであるのだ。

## おわりに

しかし、『シネマ』におけるドゥルーズの思考は、「支配する者の議論」と異なり、このように廃絶される可能性の様相を新たな形で、つまり「新たな論理学」を通じて創り直す方向に向かう。「どちらでも（どれでも）ありうる」在り方をもたらし可能性が棄却されるのは、時系列的な時間においてであった。だからこそ、ドゥルーズは非時系列な時間の下で改めて可能性という様相を探り、これを再創造するのだ。ドゥルーズの戦略は、現実＝現在と一切無縁であり、決して現に生じることがなく、生じないままであり続ける可能性の実在性を、つまり、可能性が可能性のまま現に実在するという事態を、とりわけ「脱現働化された現在の諸々の頂点の同時性」と接続させた上で、相反するどちらも存在するという「共立不可能性」の概念として裁ち直すことで、宇宙の根源的な在り方を炙り出そうとすることにある。そのことを子細に見るためにはまず『シネマ』における『去年マリエンバートで』（アラン・レネ、1960年）の特権性とこの作品を通して透かし見られる「脱現働化された現在の諸々の頂点の同時性」の在り方を具体的に検討しなければならず、これが本論の直後に引き継がれるべき課題となる。

### 文献

入不二基義、2015、『あるようにあり、なるようになる——運命論の運命』講談社。

Deleuze, Gilles, 1983, *Cinéma1: L'image-mouvement*, Paris: Les Éditions de Minuit. (=2008, 『シネマ1\*運動イメージ』財津理・斎藤範訳、法政大学出版社。)

Deleuze, Gilles, 1985, *Cinéma2: L'image-Temps*, Paris: Les Éditions de Minuit. (=2006, 『シネマ2\*時間イメージ』宇野邦一・石原陽一郎・江澤健一郎・大原理志・岡村民夫訳、法政大学出版社。)

レネ、アラン、2003、『去年マリエンバートで [DVD]』東北新社。

Lewin, Kurt, 1951, *Field Theory in Social Science: Selected Theoretical Papers*, Oxford: Harper. (=1979, 『社会科学における場の理論 増補』猪俣佐登留訳、誠信書房。)

脇條靖弘、2014、「ディオドロス・クロノスの様相理論の決定論的含意について（研究ノート）」、『山口大学哲学研究』21: 63-78。